

# 2 2 4

こんにちは。塾長の大井です。

6期生受験戦記第9回です。

キャプテンも決まり、6期生に受験の足音が聞こえてきました。秋からは外部模試を精力的に受けていきます。TOP生は毎年チャレンジャーです。元々のエリートは皆無と言っていい集団です。実力の差を長い努力で埋め、毎年のように格上を倒してきました。それはこの6期生も例外ではありませんでした。

外部模試では大部分の生徒が楽観できない立ち位置にいました。それでも私たちは、志望校を下げませんでした。

力があるから受験する。もちろんそんな受験もあるでしょう。

それでも力が足りないからといって夢を折り畳む必要はありません。力がないならつくまで鍛える。それが創立から変わらぬTOPの理念でした。

そんな中でクラスの中心になっていった3人がいました。丁寧でそつがないSさん、キャプテンとして大きく殻を破りつつあったYくん、そし

て誰よりも努力を積み重ねてきたTくんでした。

Sさんは言うならば万能型でした。得点力のあった国語を中心に、これといった弱点もなく、授業・課題もずっと一定水準以上の力を見せていました。SAPIXの桜蔭オープンでも土俵に上がっていました。

それでも、Sさんには切実というほどの気迫がなかなか見えてきませんでした。最後の最後に勝負の分岐を大きく左右するのは、紛れもなく鬼気迫る得点への執念です。Sさんの答案には、なかなか最後の覚悟が宿っていないように見えました。

それと対照的だったのがTくんでした。Tくんは不器用でした。ひらめきや上位生に見られる嗅覚の良さのようなものはほぼ皆無で、授業中も周りをぐるりと拳手で囲まれ、一人固まってしまうことも珍しくありませんでした。特に国語は授業でもずっと苦しく、前述のSさんにはいつも大差をつけられていました。何度も何度も悔しい想いをしたTくんはそれでもその度に誰よりもしつこく復習し、彼の開成への想いは揺るぎませんでした。

そして不思議なことに、外部模試では見事な答案を作ってきました。殊

に数多の猛者が集う開成模試では、国語でも普段の何倍もの力を発揮して、格上をなぎ倒すほどの得点を取ってきました。開成への溢れるほどの想いが、普段は物静かで穏やかなTくんを、とことん戦い抜く強者へと押し上げていったのです。

頂点への最初の資質は、どこまで一途にその学校を想えるかという点において問われます。

Tくんにとって、開成は全てでした。

Tくんは文字通り、開成に恋い焦がれていたのです。

(第10回につづく)

2020年11月25日

大井 雄之